『作庭記』中の「こはん」の意義について

針ヶ谷 鐘 吉

On The Meaning of A Word 'Kohan' In The Book Entitled "Sakuteiki"

By Shōkichi HARIGAYA

1. 序

『作庭記』の中に「こはん」という語が出てくるのは下の五箇所である。

- (1) 「大河のやうは其姿竜蛇のゆける道のごとく成へし。先石を立ることは先水のまかれる所をはじめとしておも石のかとあるを一は立て其石のこはんをかきりとすへし」(石を立るには様々あるへしの一節)
- (2) 「磯嶋は立あがりたる石を所々に立て其石のこはんにしたかひて浪打の石をあららかにたてわたして其高石のひまひまにいとたかからぬ松のおひですくりたる姿なるかみとりふかきをとところところうふへきなり(嶋姿の様々をいう事の一節)
- (3) 「次左右の脇石の前によき石の半はかりひきをとるたるをよせたててその次々は其石のこはんにしたかひて立くたすへし」(滝をたつる次第の一節)
- (4) 「遣水の石を立る事はひとおもてにしけくたてくたすことあるへからす或透廊のしたより出る処或山鼻をめくる所池へいる所或水のわれかへる所也此所々に石をひとつ立て其石のこはんを多も少も立へき也」(遣水の事の一節)
- (5) 「石を立んには先おも石のかと有をひとつたておせて次々の石をは其石のこはん^{註(1)}に随ひてたつへき也」(立石口伝の一節)

この「こはん」の意義についてはこれ迄大体二通りの^{註(1)}解釈がなされて来た。その一つは「ごばん」(碁盤)説であり、他の一つは「乞はん」と読む説である。現在では第二の「乞はん」説が有力であたかも定説となつたかの観さえある。余はここにこれらの説とは別に次の異説を主張して諸賢の御批判を仰ぎたいと思う。

2. 「乞はん」説を否定する理由

森纒が「乞はん」説を唱えるに至つた根拠は、前記最後に掲げた「立石口伝」中の「こはん」の少しあとに「奥石をはその石の乞にしたがひてたつるなり」と似た様な箇所があるところからの推論である。しかし推理の鍵となつている「乞」が出てくるのは凡ての「こはん」の終つたあとである。当時の人は『作庭記』を読んで最初

の「こはん」に出会つてそれを理解するためにこんな手の込んだ推理を働かすまでもなく、いとも無造作に「こはん」の意味を直ちに汲み取つたに相違ない。これが「乞はん」を否定する第一の理由である。

次は文法に関することである。鍵となつた「乞」は名詞であるのにこれをあてはめて「乞はん」とすれば推量を表わす助動詞となる。これは文法上頗る不自然で「石の乞はんにしたかひて」などとは言わない。「石の」と「したかひて」の間には名詞か又は動詞の終止型が入るべきであろう。これが「乞はん」を否定する第二の理由である。

3. 「こはん」は「小半」なり

しからば「こはん」はどういう意味を持つのであろう最初に掲げた五つの引用文を見ると、「こはん」を受ける語は「かきり」「したかひて」「ほと」という様に凡て限度や基準や程度を表わすかなり数量的な名詞が予想される。そこで余は大槻文彦著『大言海』によつて「こはん」を検べてみた。すると「こはん」(名)小半こなからノ条ヲ見ヨとある。早速「こなから」の条を引くと

こなから(名)小半〔半分、即チ、なからナリ(其条ヲ見ヨ)半分ノ又半分ナレバ、小なからナリ、物の四割^{ヨウワリ}一、又、四分一ノ称ニテ、四半分トモ云フ、小半ノ字ヲ音読シテ、小半ト云フ、半斤ノ半分ヲ、小半斤(四半斤)ト云フ、是レナリ、小半時、豆腐ノ小半挺、皆、同ジ〕

という説明である。試みにこれを引用文の(3)に入れてみると文章の前半に「石の半」とありその後半に「石の小半」となつて全文の意味がよく通る。他の引用文についても、「小半」を当てはめれば具体性を持つて理解される。

4. 「乞」は「色」の誤写なり

余は最後に今まで誰も何ら触れることのなかつた点に疑問の目を向ける。それは「こはん」を推理する鍵となつた「乞」の字である。活字本群書類従の『作庭記』が「乞」字を宛てたところに問題がある。余は谷村本と木版群書類従本でその文字を検討観察した限りでは、決して「乞」とハッキリ読みとれない。

(図板参照) 見様によれば「色」とも読める文字である。余があえて「色」を主張する理由は、この字の出るすぐ前に

「岸より水そこへたていれ又水そこより岸へたてあくるとこなめの石はおほきにいかめしくつつかまほしけれども人のちからかなふましき事なれば同色の石のかと思あひたらんをえらひあつめて大なる姿に立なすへきなり」

とあり、それに続けて

「石をたてへんには先左右の脇石前石を寄たてむとするに思あひぬへき石のかと有を立をきて奥石をは其石の口にしたかひてたつる也」

とあつて、石組の技法について形状から色彩に及んで述べている箇所である。ここでは「乞」などという抽象的な言葉の入る余裕もないほど実地に即した文章だからである。

問題の乞字(左類従本、右谷村本より)

5. むすび

以上余は「こはん」は「乞はん」に非ずして「小半」なり、又「乞」は「色」なりの説を提唱して大方の諸賢の御批判を期待するのである。

註(1) 竜居松之助が最初に唱え、現在は専ら江山正美がこの説を力説

註(2) 森蘊がその著『平安時代庭園の研究』ではじめて唱え、その後田村剛もその著『作庭記』でこの説に同調している。

Résumé

The word 'Kohan' is mentioned in the "Sakuteiki" five times. Hitherto, on its meaning, two different interpretations are put, namely-'Goban' (A checker-board), and 'kowan'-that means 'request'. But I found that they are both mistaken and that formerly it meant 'a quarter'. This is the very word, if applied to the referred passages. In the next place, according to my study of the block letters and the contents of the sentences, I found that 'koi' (乞) was the misreading of Chinese letter 'iro'. (色)

(昭和41年秋季学会発表) (41. 10. 31受付)

(6頁より続く)

Résumé

Jean-Jacques Rousseau et Ermenonville

En France également, il ne reste que peu de jardins paysagers bien que leur histoire soit relativement récente. Pour l'auteur, une des raisons de cette rareté est le fait que les jardins paysagers changent facilement avec le temps, surtout si on ne les soigne pas avec assiduité.

Actuellement, il est encore possible de se rendre compte de l'aspect d'un jardin paysager au Petit Trianon, au Parc Monceau et dans quelques autres jardins. Mais c'est le Parc d'Ermenonville qu'il faut

considérer comme le meilleur jardin paysager de l'époque préromantique en France.

Le Parc d'Ermenonville a été créé par le marquis René de Girardin d'après les idées de Jean-Jacques Rousseau qui était un admirateur passionné de la nature et qui vécut en ce lieu les six dernières semaines de sa vie. Etant le seul jardin où les idées de la Nouvelle Héloïse ont été réalisées, le nom d'Ermenonville est inséparablement lié à celui de Jean-Jacques Rousseau.

(昭和41年 関西支部大会発表)

(41. 11. 20受付)